



# 結

2020. 11. 21 No.96 yui

発行「憲法9条の会つくば」

〒305-0005

つくば市柴崎 68-103

TEL/Fax 029-858-2034



<http://peace.arrow.jp/tsukuba2/>

## おひさしぶり！ 出会いのコンサート 盛況に終わる



11月3日文化の日、ギターと声楽のジョイントコンサートが開かれました。出演者は9条の会の共同代表の堀部一寿さん（声楽）と賛同人の稗田隼人さん（ギター）のお二人です。会場は樹木に囲まれた天井の高い木造のホールで「森の音楽会」といった雰囲気でした。

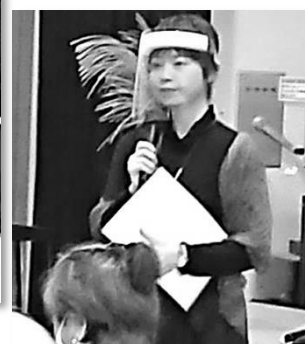
第1部の稗田さんのギター演奏は、昨年をつどいの際「聞きたかった」という声があった「アルハンブラの思い出」から始まり、映画音楽、タンゴやベネズエラワルツなど多彩な内容でした。演奏曲目の解説や、音楽家事情などのトークも楽しく、木のホールに柔らかく、時に激しく響くギターの音色に日頃の慌ただしさをすっかり忘れてしまうひとときでした。

休憩時間にはセルフサービスで、コーヒーや紅茶などご用意しました。飲み物があるとほっとしますね。時間が短くて申し訳ありませんでした。

第2部の堀部さんの独唱はひきがたりの曲とピアノ伴奏の曲がありましたが、ピアノ伴奏の方との息もぴったりでした。9条の会の演奏会ということを考えて頂いた選曲だったのか、平和や人々のしあわせや支えあいをテーマにした歌が多かったように思いました。堀部さんは、今回の新型コロナの影響を大きく受けられ、2月以来の演奏会であったそうです。

木のホールの響きは声楽にもぴったりのようで豊かな声量に圧倒されました。稗田さん、堀部さんのお二人の演奏を聴き、あらためて文化や芸術は「贅沢なもの」ではなく人々が生きていく上で必要不可欠なもの、生きる力を支えてくれるものであると痛感しました。

今回、会場の定員が通常の半数に抑えられていたため、参加希望の方を相当数お断りすることになってしまいました。お詫びを申し上げます。また、コンサートの運営にご協力下さった多数の賛同人の皆様、ありがとうございました。（穂積）





「言葉」を弄ぶ“菅政治”

## 『総合的・俯瞰的』『多様性』とは何なのか

～日本学術会議、6人任命拒否の説明の矛盾～

### ◆論理の破綻

「政治」とは「言葉」によってつくられるものです。菅政権の「言葉」を検証してみます。

10月はじめに任命拒否問題が明るみに出て批判が噴出し理由説明を求められたとき、加藤勝信・官房長官は、「総合的・俯瞰的観点に立って判断した」と述べました。「俯瞰（ふかん）」という言葉（辞書によれば、「高い所から広く見渡すこと」の意）を使って曖昧に逃げようとしたのですが、言葉通りに捉えれば、「優れた研究又は業績がある科学者のうちから会員の候補者を選考」という日本学術会議法（17条）の規定以外の“高い所”からの“判断”が働いたということになります。それは、安倍政権下での様々な悪法の強行に反対の意思表示をした6人を“人事を盾にして排除した”というのが普通の受け止め方です。

もともとこの言葉は、2003年に総合科学技術会議が出した「日本学術会議の在り方」という具申書の中で「…総合的・俯瞰的観点から活動することが求められている」と記述されたものです。つまり、日本学術会議という“組織”が活動する上で求められる“学問的姿勢”ということになります。いつの間にか、言葉の行為主体がすり替わっているのではないのでしょうか。

加藤長官の発言を繕う意図があったのかは分かりませんが、その後、菅義偉・首相は、「総合的・俯瞰的活動を確保する観点から」6人の任命を見送ったと繰り返しています。それは、6人がこうした観点からの活動を阻害する存在であると首相が評価したことになります。専門家でない政府が、どうやって評価したのでしょうか。6人の研究・業績に対する、そして学問の自立性に対する、著しい侮辱と言わざるを得ません。

### ◆ゴマ化しの上塗り

「総合的・俯瞰的」という言葉で煙に巻こうとしたやり方が行き詰まると、今度は、菅首相が「105人の推薦名簿は見えていない」と言い出します。名簿を見ずに「俯瞰的な判断をした」というのは矛盾するし、首相でなければ誰が除外したのか。総理大臣が推薦段階の名簿を見ないままに99人を任命したとすれば、日本学術会議法（7条2項）の規定に反します。「推薦された方々がそのまま任命されてきた前例を踏襲していいのかと考えてきた」という別の説明は、自らの判断であると言っていることに等しいのに。6人除外のキーマンとされる杉田和博・官房副長官（警察庁出身）の国会招致は、頑なに拒んでいます。

トップの不都合を隠そうとして何かを答えるたびに新たな問題が生じ、ゴマ化しの詭弁が上塗りされる——モリ・カケ・桜問題の疑惑を取り繕おうとした“アベ政治”をまさに継承しています。人事を通して異論・批判を封じ込めようとする手法は、「憲法」によって抑制されるべき「権力」を恣（ほしいまま）にしようとする政権の姿勢を顕著にするものです。

### ◆支離滅裂

拳句の果てには、日本学術会議という組織そのものの在り方を改革の対象にするというすり替えに踏み出しました。同会議を“悪者”にすることで、多くのフェイク情報も拡散しました。

10月26日からようやく臨時国会が開かれましたが、菅首相の所信表明演説は、日本学術会議の問題に全く触れませんでした。続く国会論戦の中で野党からこの件についての問題点を指摘されると、今度は「多様性」という言葉を持ち出しました。「民間出身者や若手が少なく、出身や大学にも偏りが出ないことを踏まえて、多様性を念頭に私が任命権者として判断を行った」と答弁しました。「判断」したのは首相自身だったと公的に認めたのです。そして、除外された6人は、首相の言う「多様性」という点では、旧帝大以外の「私大」の所属が3人、「女性」が1人、「若手」では50代の方も1人入っています。しかも、6人すべてが「人文・社会科学」の研究者であることは、学術会議の「バランス」を崩す暴挙です。

本稿の見出しに「弄（もてあそ）ぶ」という言葉を使いました。もともと「手に持って遊ぶ」の意ですが、「自分の欲望を満たすことだけを目的としてそのことに関わる」という意味もあります。“菅政治”の本質は、“恣意的な権力の行使”自体を目的としているということではないのでしょうか。

\*日本学術会議の沿革や任命拒否問題の経緯については、「憲法9条の会・アピール」をご参照ください。

（後藤）



## 「憲法9条の会つくば」の活動から



◆賛同人 2020年11月10日現在  
 総数 1012名 (市内 726名)  
 ◆改憲発議反対署名 11月10日現在 625筆

当会では毎月第3日曜日に定例署名、9日に9の日署名を行なっています。その他、「戦争をする国づくりNPO@つくば」と共に、毎月3日「アベ政治を許さない」スタンディングと署名を行ないます。

### 定例署名 報告

▼11月9日(月)、定例の「9の日署名」活動と、日本学術会議会員任命拒否への抗議活動とを兼ねて行いました。場所はセンター広場、時間は12:00~13:00。晴天なれど北風が強く、寒い日ではありましたが、参加下さった方は総数10人、久しぶりの多人数参加で元気を頂き、署名を呼び掛け、チラシを配りました。北風が吹き抜けるせいか、通りすぎる人は足早で、署名は5筆でしたが、チラシの受け取りは、いつもよりずっとよく、総数100枚以上は受け取って頂けたと思います。チラシを受け取った人は、建物に沿って立つ3人のメンバーが手で持って下さった横断幕を読んで下さっているようでした。横断幕には、「日本学術会議会員6名の任命拒否 みんなで声をあげ撤回させよう！」とありました！

チラシには、日本学術会議の6名の任命拒否への抗議と、その撤回を求める内容で、憲法9条の会つくばのアピール、研・学9条の会の緊急声明、日本科学者会議茨城支部の「抗議と撤回を求める声明」の3つの声明が含まれていて、今日の署名活動には日本科学者会議茨城支部からも駆け付けて下さった方もおられました。つくばで活動している市民団体が、連帯してこの運動を進めていることを示すものとなりました。(署名担当)



### 署名行動への呼びかけ

10月は9の日署名も定例署名も雨模様のため中止となってしまいました。菅政権は学術会議会員候補6名の任命拒否をしました。これは、学問の自由への介入にとどまらず、言論、表現の自由等を奪うことにもつながり、その先に見えてくるのは戦前の時代です。今、おかしいことはおかしいと声を上げる時です。最近、署名行動参加者が少なく寂しい思いをしています。時々で良いですから皆さん、参加してくださいね。(事務局)

### フラワーデモつくば 続けることが、広がりへ

11月11日、寒風が吹き抜ける中、つくばセンター広場で、「フラワーデモつくば」が行われました。新型コロナ感染拡大で一時中断をはさんで、今回は5回目になります。11日には9人が参加、お花を手に、プラカードを掲げ、チラシを配る、という「サイレント・デモ」です。それでも、通りかかる人たちの中には「なにごと？」とプラカードを見入ったり、声掛けをして下さる方も何人か、います。説明すると、時には「次はいつ？」と聞く人も、います。次に向けて期待が高まります。

毎回、新しく参加して下さる方がいます。先月は10人が参加、このうち2人は守谷からと柏から来られた方でした。心に葛藤を持ち、心をつなぎたい思いで来られたのでしょうか。今月も新しい参加者が2人、そのうちの1人は流山から来られたという男性でした。ボランティアで障害を持つ方の介護をしている方で、毎月参加したいとのこと。

新型コロナ感染の拡大で、家庭内暴力やいじめなどの相談が急増している、と報道されています。感染への不安、生活が圧迫され、将来への見通しがつかないことへのいら立ち、背景は多様でしょうが、「今だけ、金だけ、自分だけ」の社会を作った自民党政権の責任は大きい、と思います。(長田)

### 行動予定

※コロナ問題の社会状況の変化により変更する場合があります。

- 12月3日(木)21年1月3日(日)「アベ政治を許さないスタンディング」13:00~13:30 つくば駅 A3 出口付近 (市民アクション主催)
- 12月9日(水)9の日署名 12:00~13:00 アルス前
- 12月19日(土)事務局会 10:00~12:30 市活予定
- 12月20日(日)定例署名 12:00~13:00 アルス前
- 1月9日(土)9の日署名 12:00~13:00 アルス前
- 1月16日(土)世話人会 13:30~15:30
- 1月17日(日)定例署名 12:00~13:00 アルス前



ドキュメンタリー

## 沖縄戦 知られざる悲しみの記憶

2019/太田隆文・監督/105分

この映画は日本で唯一の地上戦が行われた沖縄戦の悲劇を描いたドキュメンタリー。沖縄戦の体験者 12人と専門家 8人による証言、米軍が撮影した記録映像により、沖縄戦の想像を絶する悲惨さを観る者の脳裏に焼き付ける。沖縄戦の死者は、米国側は約1万5千人、日本側はその15倍、約18万8千人で、沖縄出身の軍人は2万8千人、一般の市民は9万4千人。沖縄県民全体では12万4千人以上、県民の4人に1人が亡くなったと言われている。

兵力不足を補うため、多くの住民が戦闘要員として動員され、また14歳以上の住民も学徒隊、護郷隊、救護班、炊事班等として動員された。その上更に、地上戦の戦場となり、多くの住民が犠牲になった。また捕虜となれば殺される、強姦されるという言葉によって多くの住民が集団強制死を強いられました。

その背景には本土決戦の備えへの時間稼ぎのために沖縄が捨て石とされたからである。戦力で劣勢にあり、沖縄が玉砕することも、承知の上で、時間稼ぎとして持久戦をさせたからである。

そして戦後、日本はアメリカの沖縄占領を認めて沖縄を、日本のサンフランシスコ条約締結の捨て石にしました。敗戦から75年になりますが、いまだに沖縄は米軍基地の日本の7割が集中し、新たな辺野古基地の建設も進み、日米安保条約の捨て石とされています。

沖縄県では2度の県民投票が行われました。1996年の「日米地位協定の見直しと基地の縮小」、2019年の「辺野古米軍基地建設のための埋立」の賛否を問うもので、いずれも県民の意思は明確に示されていますが、日本政府はそれを無視して今も辺野古湾へ土砂を搬入し続けています。

### インフォメーション

◆12・8 不戦のつどい…オンライン実施が決まりました。

開催日 12月9日(水) 受付開始 18:20 開会 18:30  
講師 佐々木啓先生(茨城大学)「日本学術会議問題、戦前の思想弾圧事件など」

参加申し込み方法:「不戦のつどい」のメールアドレスに申し込む。アドレスは [12.8notsudoi@gmail.com](mailto:12.8notsudoi@gmail.com) 締め切りは12月8日

つくば市役所コミュニティ棟会議室3で19人(定員になり次第締め切り)でオンライン講演に参加できます。こちらにも、e-mailで事前ご連絡ください。



このような沖縄県民の意思を無視し、国民主権、民主主義、平和主義を踏みにじる政権を1日も早く終わらせることが、私たちに課せられた責務を思います。

この映画について太田監督は「近年の映画では戦争はカッコよく、勇気ある戦いであるかのように描くものがある。が、本当の戦争=日本で唯一の地上戦が行われた沖縄の現実を見る時に、それがいかに嘘で固められ美化されたものであるかがよく分かった。その意味でこの作品は「沖縄戦の歴史を知る」だけでなく、戦後の歴史、戦前の日本、さらには未来の日本が見えてくる。この作品を見ることで、そんなことを考える機会にさせていただければ幸いだ」と述べられている。

この映画は浄土真宗本願寺派の総合研究所の平和に関する取り組みの一環として制作され、DVDにして全教区全教務所に配布されました。沖縄での完成披露上映会で「軍事力は戦争の抑止にはならず、市井の人が犠牲になることが理屈抜きにわかる映画」など一般上映を求める声が多かったことから映画館で公開したとのこと。一般に宗教は心の問題として、社会的な活動に消極的ですが、その働きを嬉しく思いました。

また、この種の映画は常設の映画館ではなかなか上映してくれなくて、自主上映が主となりますが、この度は土浦セントラルシネマズで上映してくれました。敗戦の日前後の上映でしたが、同館で上映されていた他の2作品は「この世界のさらにいくつもの片隅に」と「お母さんの被爆ピアノ」で、3作品とも戦争を題材にしており、館主のあの戦争を忘れてはいけないという心意気が感じられました。嬉しくなり映画館のスタッフに思わず声をかけてしまいました。

(阿部眞庭)